http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.230　03/07/02

リアディゾンの秘密（その2）

（前号の続き）

「る・らる」はまた受身を表しますが、日本語の受身はヨーロッパ語の受身と違う点がいろいろあります。例えば、日本語の受身は抽象名詞を主語として成り立つことはありませんでした。

苦しみが報われる。

うれしさが半減された。

のような表現はヨーロッパ語の翻訳の口調として今日多くありますが、日本語の古典語の詩歌などには、このような表現を見いだすことは困難です。

また受身はヨーロッパ語では他動詞に付いて「殺される」「捨てられる」「打たれる」となり、自動詞に付くことはありませんが、日本語では自動詞にも「る・らる」の受身形が付くことができます。例えば、次のような受身があります。

先日母に死なれました。

恋人に逃げられて世をはかなんだ女。

「死ぬ」「逃げる」のような自動詞の受身は、英語では他動詞の受身と同じように be 動詞をそのまま使って直訳しようとしてもできません（He was died by his mother. は英語として成り立たない）。しかし、日本語の「る・らる」という助動詞は、それの付いた動詞の動作が、成り行きとして自然に成就したことを表すのですから、「母に死なれた」とは、つまり「母において死ぬという動作がいつの間にか自然に成り立った」ということです。自分はその死に関与していない。自分はそれに手を加えていない。自然の成り行きとして母において死ぬという動作が起こったという言い方です。「恋人に逃げられた」というのは、「恋人において逃げるという動作がいつの間にか自然に成立した」、自分はそれに関与していないという表現です。こういう自動詞の受身の形は多くの場合、迷惑を表すので「迷惑のる・らる」と言われていますが、要するに、日本語の受身は自分が関与していないのに自然に成り行きとしてある事態が成立するという「る・らる」を基礎にしていますから、自動詞の受身を作ることができるのです。（大野晋『日本語の文法』角川書店、のち角川文庫）

＊

最後の「尊敬」については、今まで読んだことをもとにして、自分で想像してみよう。ヒントを挙げておくなら、日本人は、他人を仲間としてウチ扱いにするようになると馴れ馴れしい表現（つまり尊敬とは逆の表現）を使うようになるが、反対に、ソト扱い、つまり、疎遠なものとして扱うことで敬意を表すということである。つまり、疎遠なものに対しては、自分は関与しないで相手が自然に動作したように扱うのである。

＊

古典の言葉には、日本人の考え方や感じ方の伝統が色濃く表れている。人間の判断を表す助動詞には、特にその傾向が強い。無味乾燥と思われがちな文法だが、その背後にはこんな豊かな世界が広がっているのである。